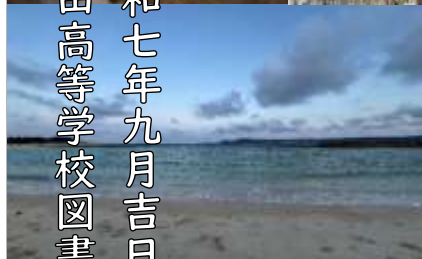


図書館だより ～ 沖縄 ～



令和七年九月吉日・第一〇二号
成田高等学校図書委員会発行

『沖縄』

高校三学年 学年主任 地歴科教諭 齋藤亮

戦争は人間の仕業です。

戦争は人間の生命を奪います。

戦争は死そのものです。

過去を振り返ることは、将来に対する

責任を担うことです。

広島を考えることは、核戦争を拒否する

責任を取ることです。

(ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の言葉より)

これは、アメリカによるイラク戦争(二〇〇三年)を痛烈に批判しながら亡くなった、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の言葉です。ヒロシマとナガサキ、そして沖縄の基地問題。これらを「遠くにありて近きもの」として、どこかでしっかりと向き合う時間を持つてほしい。この思いから高校二年生の秋、修学旅行で沖縄を訪れました。

ひとたび戦争が起これば、「自由」は殺され、「人命」は軽んじられ、「文化」は破壊されます。私たちは、ヒロシマや沖縄の地上戦を学ぶことで、戦争が決して問題解決の手段にならず、むしろ核戦争によって人類そのものが消滅する可能性があることを知りま

した。いままさに、人類が消滅しかねない危機に直面しているのではないだろうか。改めて、「文化」の持つ力が試されているのです。「自由」を守り、「戦争」を拒絶する。そのために本当に大切なものとは、何でしょうか。もし「愛」の反対が「無関心」だとすれば、戦争を拒絶しない人は「愛」のない人たちです。それは、恐怖と絶望の中で涙を流し、戦争によって人生を破壊されていった多くの人々への関心と想像力を持ってないということだからです。沖縄のガマ(自然洞窟)に入り、暗闇の中で感じた静寂。誰もが口を閉ざし、当時の沖縄が「鉄の暴風」と呼ばれた状況を想像したことを思います。



(民泊を終えて伊江島から出発・JB提供)

このように、修学旅行とは、実際の地に赴き、見学し、学ぶ旅です。沖縄や広島の歴史を学ぶことは、愛の範囲を広げることでもあります。時を越え、空間を越えて、現地の人々の声に耳を傾けることで、私たちの学びはより深まりました。「文化」は人生を豊かにし、「戦争」は人生を破壊する。沖縄も広島も、ただの「訪問地」ではありません。主体的に目を向け、当時の歴史に触れること。それこそが、修学旅行でそこに行く理由です。

沖縄返還から五三年。現在も日米安保条約と日米地位協定によって、米軍の地位は保障されています。一九七〇年のコザ暴動は、ベトナム戦争の最中に起きた出来事でした。嘉手納基地からはB-1 戦略爆撃機が直接ベトナムへ出撃していました。沖縄はベトナム戦争における米軍の重要な出撃拠点であり、ベトナムの人々は沖縄を「悪魔の島」と呼びました。その過去を学びながら、一方で、透明度の高い海に浮かび、太陽の光を全身に浴びながら、沖縄の空を見上げる。今を生きていること、自然の恵みに感謝すること、私たちは実感しました。美しいエメラルドの海を、二度と赤く染めてはならない。

「ぬちどうたから(命こそ宝)」。

今を生きていることに感謝しながら、どうか他の地へも、学びに出かけてください。

『成田エイサー美ら海会』

図書部・技術家庭科教諭

二G

吉田純子
中村優斗

(成田太鼓祭・成田エイサー美ら海会の皆さん)

皆さんは沖縄の伝統芸能であるエイサーを知っていますか。お盆に先祖の霊を送り出すための踊りです。本土でいう盆踊りと似ていて、三線や太鼓を鳴らし踊りながら練り歩く姿は圧巻です。今回、成田で活動されている団体『成田エイサー美ら海会』に、取材をさせていただきました。日頃の練習風

景や成田太鼓祭での華やかな演舞も見ることができ、興奮しました。

代表の方(以下、代表の方)に沖縄の伝統あるエイサーについてお話を伺いました。

(代表の方)出身である「琉球」のことをいろいろな人に知ってもらいたくてこの会を設立しました。エイサーの難

しい部分は、本島ではあまり聞きなれない曲なので覚えるのが大変なことです。また、ほかの舞や踊りと比べて大きく違うところは、太鼓を叩く時、撥を一本しか使わないことです。エイサー

というのは元々空手の動きに、集落が襲撃された時の鎌や鍬、ヌンチャクを使った威嚇の動きが合わり出来た踊りで、鎌や鍬などが太鼓の撥へと変化していきま



踊りのその力強い動きは、自由のための格闘護身術が舞踏に変化していったカポエイラ(ブラジルの伝統格闘技)に似ていると思いました。

(代表の方)グループ内では、コミュニケーションを一番大切にしています。ただのグループメンバーとしてではなく、家族や兄弟のよう

に、いつでも気軽に相談し合える存在にしていきたいと思っています。

「いちゃりばちよー(一度会えば皆兄弟)」

です。観客の方も、見るだけではなく一緒に参加してほしいと思います。そしていずれば色々な学校の組体操に変わるものとしてエイサーを押し広めていきたいと思っています。

(S君)祭りが好きだから。



(成田太鼓祭・左手前がS君)

えています。

今回の取材を通じて、沖縄から遠く離れたこの関東の地でもこうして琉球の伝統が受け繋がれていることに驚き、感動しました。唯一無二の伝統を絶やさないように、もともとエイサーが全国各地に広がっていつてほしいです。

『カフィーを待ちわびて』

△著者△原田マハ △発行△宝島社

三A 加瀬晴菜

あの絵馬に書いてあったあなたの言葉が本当ならば、私をあなたのお嫁さんにしていただけますか。(本文より)



主人公の友寄明青の元に届いた一通の手紙から、変わり始める生活の描写にどんどん惹き込まれていきます

た。私自身好んで読書をするタイプではありませんが、スラスラと読むことが出来ました。

昨年の十一月月上旬に修学旅行で沖縄県を訪れ、それをきっかけに図書館だよりのテーマが「沖縄」に決まりました。本屋さんに行き、沖縄を題材にした本はないかと探していたところこの本と出会い、パラパラと本をめくって読んでみると、所々に沖縄の方言が混ざっていて「これは面白そうだな」と思いました。買う決め手となったのは、実際に訪れた離島の中でも方言を教えていたく機会があり、簡単な挨拶や褒めるときに使う言葉など沖縄ならではの経験をして、興味を持っていたからです。読んでみると、私の知っていた方言が出てきてどこか懐かし

さを感じる温かさや、自然に囲まれた中で生活を思い出して焦がれるような思いになりました。本の内容は、手紙の差出人である幸とりゾート開発を背景に徐々に明らかになる彼女の過去、そして正体。あたたかく、どこか切なさが残る恋の物語です。

『沖縄を識る 琉球列島の神話と祭り』

△著者△比嘉政夫

△監修△国立歴史民俗博物館

△発行△歴史民俗博物館振興会

三A 近藤丈太郎



沖縄の伝統的な祭りと昔から伝わる伝説を細かく紹介している一冊です。修学旅行を通して、沖縄

の文化や言い伝えは本土とどのような違いがあるのか、逆に共通点があるのかを理解するためにこの本を選びました。私自身、この本を読んでみて沖縄の伝統は私たち本土の人々には馴染みのないことばかりでとても興味深い内容でした。

本の一部を紹介すると、沖縄の祭りではシヌグ祭りという祭りがあり、無病息災や五穀豊穡を祈願する行事で、二つの祈願がされます。まず一つ目は海神という女性を

メインにした行事でイノシンサリと魚捕りで豊年を祈願します。二つ目の主な行事は西、北、南の三か所の山に男たちが、つる草や草木を身に付けて神となって下山します。集落で神として迎えられ、人々を草木ではたいて邪気を払います。夜になると女性は伝統の舞い踊りを歌い踊り、豊漁を神に祈ります。

次に伊勢神宮の新嘗祭を用いて本土との違いを紹介します。新嘗祭とは毎年十一月二十三日に天皇陛下が五穀豊穡に感謝を捧げ、祈願します。祭具は短い畳、白い半畳などが使われ、音楽などはかけずに行います。一方で沖縄では音楽と踊りが中心で、エイサーや琉球舞い踊り、伝統的な衣装を身にまとった行列などが見られます。海や自然に関する祭りも多くあります。

この様に本土との違いに注目すると沖縄の祭りは異なる点が沢山あります。この本には他にも沖縄の伝統を深く紹介しているので是非読んでみてください。



『沖縄戦 久米島の戦争』

私は6歳のスパイ容疑者』

編著 久米島の戦争を記録する会

発行 インパクト出版会

三B 阿藤りん

住民の敵は米軍だけでなく、日本軍も含まれていた・・・？



この書籍は、沖縄の久米島で起こった日本軍による住民虐殺事件を中心に、当時の状況や証言を詳細に記録し、戦時中の記憶を人々に伝えることを目的として書かれています。この悲劇は、加害者と被害者が同じ住民だったため戦後長らく語られることがなかったようです。当時久米島は軍の監視による支配下にありました。住民がスパイ容疑で処罰されたり、日常生活に恐怖や苦悩が広がったりする状況を具体的な証言をもとにまとめてあります。



(伊江島・アハシヤガマ)

編者の一人が「私は六歳でスパイ容疑者になった」と告白するようになり、子供までもが戦争の理不尽な影響を受け

ていました。また、そのような中、住民たちがどのように生き抜いたのか、疎開や避難生活、物資不足、軍からの理不尽な統制や差別が住民に何をもたらしたのか、具体的な体験談として記録されており、「戦争とは何か」を改めて考える機会になりました。

「戦争は二度と繰り返してはいけません」と。この本は戦争を体験していない私たちにも、その言葉の重みを教えてくれる一冊です。

『世界の民族衣装の事典』

監修 丹野都 発行 東京堂出版

三B 大谷涼



皆さんは沖縄の民族衣装を知っていますか？沖縄の民族衣装を「琉装」、沖縄の方言ではウチナースガイ

と言います。ウチナーは沖縄、スガイは装いや身なりという意味があります。琉装とはかつて琉球王国時代に着用されていた衣服・髪型・着装のことを言います。色鮮やかな生地に独特な柄や模様を持つ琉装は見る人の目を強く惹くことでしょう。琉装を見てみると、日本の着物や中国の漢服に似ている部分があることがわかります。ここから沖縄は日本と中国の影響を受けながら

独自の文化を確立していったことがわかります。着物と琉装の違いとして、着物は帯留めをして、袖は閉じており、きっちりとして着ている印象がありますが、琉装は帯留めをせずに細い紐を使い、大きく広がった袖でゆったりと着て見ることが特徴的です。成人男性の盛装は内衣が上下に分かれている二部式の七分丈で長着を大帯で固定します。成人女性の盛装は二部式の内衣にやや長めの広袖長着を羽織ります。服の生地や色は貴族や士族、百姓などによって分けられていました。これを「琉球服制」と呼びます。平安時代や江戸時代の本州と同じように生地や色を見ただけでその人の身分がわかるようになっていたということです。最初に書いた通りに琉装は色鮮やかな生地に独特な柄や模様を持っていますがそれらは紅型と呼ばれる加賀友禅や京友禅に並ぶ日本の伝統的な染色技法によって表現されています。紅型は顔料や植物染料を用いますが、琉球藍を用いた藍型と呼ばれるものもあります。この書籍には写真なども載っていてとてもわ



(琉装着付け体験見本)

かりやすく、ここに書いてある以上のことが
沢山書かれています。

今回は沖縄だけを紹介しましたが、その他にも世界各国の民族衣装が載っているの
で気になった方は読んでみてください。

『沖縄戦の子どもたち』

著者 川満彰 発行 吉川弘文館

三B 小野田稔也



この本は、沖縄で地上戦が行われた頃の子どもたちに関する
ことについて書かれています。

一つ目は、「子どもの教育」。明治政府は武力をもつて琉球王国を日本国の一県として併合し、異なる言語や習慣を本土と同じようにするため、同化教育・皇民教育を行ったと書かれています。大和人(ヤマトウンチュ)と沖縄人(ウチナーンチュ)との上下関係を明確にし、沖縄でより本土の言葉を確立するため、沖縄語を喋ると標準語ではない言葉と話したことから、「方言札」をつけられるなど精神的にダメージを与えたところ。とにかく、沖縄の子どもを「日本人」にしようとする様子を思い浮かべることができるといいます。

二つ目は、「兵士となった少年少女」。すべ

ては戦争のために、少年少女たちがどのよう
に兵士になったか、または兵士を支える
ためにどのような訓練を受けたのか、精彩
に記されている。

三つ目は、「戦場で生き残った子ども」。生
き残った子どもたちは地上戦に備えるため
集団疎開をおこなったとある。疎開後、あ
る程度の年齢になって兵士になるか、あるい
はその前にアメリカ兵による残虐行為を行
われるんじゃないかという恐怖心におお
られ、精神的に苦しみ、追い詰められて集団
自決してしまう様子が書かれています。

四つ目は、「戦火のなかの教員と御真影」。
当時の学校から逃げることで済まずに子供
たちを守る教員の様子が描かれている。ま
た天皇の写真という意味である御真影をど
のように扱っていたかを表す。

最後は、「戦災孤児の戦後」である。日本
本土よりひどい苦しみを味わった沖縄人の
悲惨で壮絶な戦後の様子が描かれている。

この本を読んでいまの沖縄があるのは、戦
火を生き延びた子供たちによつて、作られ
たということを感じた。何もない状態から
立ち上がり、復興を成し遂げたと思う。ま
た、今後、戦争を二度と引き起こさないた
めにどうしたら良いか、答えない問題をす
べての人々が考え続けていかなければなら
ないと思う。

『こちら、沖縄美ら海水族館 動物健康管理室。』

世界一の治療をチームで目指す

文 岩貞るみこ 発行 講談社

三C 岡本汐恩



皆さんは、沖縄の
美ら海水族館を訪
れたことはありま
すか？この水族館には、
普段あまり見るこ
とができないジンベエザメやマンタなど、大
小様々な魚たちが生息しています。また、
生き物たちの健康を守るために働いている
人たちもいます。この本では、水族館の裏側
で行われている生き物たちの治療や健康管
理に関することが飼育員・動物看護師・獣
医師・検査担当者などスタッフの視点から書
かれており、どのように生き物に接し、どの
ようにして命を守っているのかがよくわか
ります。ここから、動物健康管理室の人たち
は試行錯誤や慎重な動物との関わり方が
求められる大変な仕事だと思いました。

今回紹介するのはイルカの健康管理のお
話です。イルカは非常に知能が高く、スト
レスを感じやすい生き物です。そのため、体
面だけでなく精神面にも細やかな配慮が必
要になります。例えば、イルカはショーの訓

練以外にも、血液検査のための血液を採取する訓練もあります。このようなトレーニングの積み重ねが健康管理のカギとなります。また、イルカが体調を崩し手術が必要になった場合には、特に注意が必要です。麻醉を使用する際には、適切な量を慎重に計算します。麻醉のかけ方が過剰だとイルカが溺れる恐れがあり、水槽の水深を調節したりして安全を確保しなければいけません。さらに、治療時間が長引くとイルカへの負担が大きくなり、イルカとの信頼関係すら崩れてしまう可能性があります。イルカたちとのかかわりを熟知した飼育員が動物健康管理室の人と話し合い、手術や処置は短時間で済ませよう、チームになつて線密な計画を立てます。治療を終えた後も、イルカが無理なく元の状態に戻るよう、慎重な経過観察が行われています。

この本には、イルカ以外にも、ヒブダイやウミガメ治療、マナティの出産のサポート、さらには海洋環境の保護活動の話などが書かれています。どのお話も生き物たちの健康と命を守るために尽力する健康管理室の人たちの情熱が見えてきます。この本を読んでも、ここまで動物たちが大切に育てられていることを知り、その努力によって私たちはあのイルカショーなどを見られているのだなと感動しました。この本を読むことで、より沖縄の水族館を楽しめると思います。

『沖縄文化論 忘れられた日本』

著者 岡本太郎 発行 中央公論新社

三C 野村桃々



沖縄の文化や歴史、そしてその独自性に対する深い洞察を示した一冊です。沖縄が持つ独特の文化背景や

精神性を日本の本土とは異なる視点でとらえています。沖縄には戦後の日本社会の中で忘れ去られた、または軽視された歴史的・文化的な側面が数多く存在し、それらを再認識することが必要だと問題提起がされています。今回はその沖縄文化の中のユンタという歌についてピックアップしました。

ユンタとは沖縄で農作業や共同作業の場で歌われる労働歌であり、単なる歌という枠を超えて人々を結び付けてきました。

ユンタの特徴的なリズムやメロディは、労働のリズムと一体化しています。単調になりがちな作業の中、歌うことで仲間との連帯感が深まります。ユンタの歌声が響くことで、作業そのものが生き生きとしたものへと変わり、現代社会では忘れられがちな音楽の原点的な役割だと言えます。また、言葉選びや韻、リズムに即興性が含まれることも多く、歌詞が時には真面目な内容であったり、ユーモラスであったりします。著者が指

摘するように、沖縄文化には「忘却されない生命力」が宿っているのです。戦争や歴史の中で多くの者が失われた一方で、ユンタのような伝統的な歌が今も生き続けていることは沖縄の強さと美しさを象徴しています。単なる過去の遺産ではなく、現代においてもなお響き続ける「生きた文化」であると書かれています。

写真についても同様のことがいえます。本書に収められている祭りや民俗芸能、人々の日常の風景が鮮明に写されている写真は、単なる記録ではなく、沖縄文化が持つ原始的な力を直感的に感じさせるものとなっています。被写体との距離が近く、まるでその場に立ち会っているかのような臨場感を生み出し、どこか親しみやすいものとして私たちに語りかけてきます。

また、沖縄における文化的な抑圧や困難についても触れられています。沖縄戦やその後の米軍統治によ



(国頭郡伊江村にて撮影)

り、沖縄の人々は長い間精神的、物理的な苦しみを強いられました。このような歴史的背景が、沖縄文化の特性を形作り、またその文化が日本本土とは違う形で

発展した要因ともなったことが記されています。沖縄の歴史が「日本文化の辺境」として、しかし同時にその文化的価値が重要であることを強調しています。

本書を通じて、著者は沖縄文化を単なる「地方文化」としてではなく、日本全体の文化を再構築するための鍵として捉えています。沖縄が抱える問題や歴史的背景に対して深い共感と理解を示し、その文化的な価値を再評価することが、今後の日本社会にとって重要な課題であるというメッセージが込められています。

「沖縄文化論 忘れられた日本」は、沖縄文化を愛し、その独自性を深く理解しようとする岡本太郎の熱い想いが詰まった一冊です。この本を読んだ後、あなたはもう沖縄を「ただの南国」とは思えなくなるでしょう。

『沖縄のトリセツ』

〈編集〉昭文社編集部(「トリセツ」編集チーム)
〈発行〉昭文社



三D 楠本姫生

この本は、地図や写真を多用し、沖縄の地形や成り立ち、名所、食文化などが詳しく紹介されています。

る、沖縄について学べて観光にも役立つガイドブックです。「トリセツ」という言葉が示すように、沖縄を「取扱説明書」のようにわかりやすく解説しています。

日本列島の南西端に位置する沖縄は、独特の自然環境と生態系を持つ地域です。その地形は、約二千万年前の造山運動によって形成された琉球列島に属し、沖縄本島をはじめとする多くの島々から構成されています。地質は南北で異なり、新しい地層と古い地層が混在しています。

特に、隆起したサンゴ礁がエメラルドグリーンの美しい海を生み出しており、観光には欠かせません。日中は透きとおったきれいな海、夜は月光が水面に反射する幻想的な海、更には満天の夜空が見られる浜辺と、いつ行っても絶景のポイントが広がっています。

また、沖縄本島北部の「やんばる(山々が連なり、森が広がる地域)の森」は、亜熱帯の常緑広葉樹林が広がり、ヤンバルクイナやノグチゲラなどの固有種が生息する貴重な自然の宝庫です。この地域は、二〇二一年七月に世界自然遺産に登録され、その生態系の重要性が国際的にも認められています。

沖縄の魅力は自然だけではありません。この本を読んで少しでも沖縄に興味湧いたら、実際に沖縄に行ってみてはいかがでしょうか。

『沖縄 平和の礎』

〈著者〉大田昌秀 〈発行〉岩波書店

三D 本庄結羽



著者の大田昌秀さんは当時、沖縄の県知事で戦後の復興に貢献しました。この本は、沖縄戦の出来事や戦後の復興などの講演が四つの文章に分けて書かれています。

一つ目は、「沖縄の平和と未来を考える」です。ここでは、一九九〇年三月に行われた琉球大学における最終講義の内容が書かれています。この話をしてしたのは戦闘中に足を負傷した人でした。戦闘中に起きたことや、話している人の研究などが鮮明に描かれています。

二つ目は、「明るい未来を求めて」、「学ぶ楽しさ生きる喜び」、「二十一世紀に向けた沖縄のグランドデザイン」の三つに分かれています。その中の、「二十一世紀に向けた沖縄のグランドデザイン」では、一九九四年六月一日に行われた社会党自治体政策研究第二十四回全国集会での公演が書かれています。内容は平和の礎と沖縄戦の関係性と二十一世紀の明るい未来のための大規模な計画についてです。

三つ目は、県民総決起大会でのあいさつ

や、最高裁判所での意見陳述などが書かれています。最高裁での意見陳述は大田昌秀さんが上告し、その内容は沖縄の基地問題でした。大田さんが沖縄の米軍基地を撤廃してもらえるように裁判所で話したことが書かれています。

最後は「公告・縦覧に応じた理由」です。ここでは、三つ目に書かれていた最高裁判所の決断や、大田さんと総理大臣との会談の様子が鮮明に書かれています。

この本を読んで僕は、改めて沖縄戦の悲惨さや、戦後の復興の大変さや、沖縄県民のおかげで今の沖縄があるということを改めて知ることができました。また、沖縄以外の都道府県が沖縄の基地問題に目を背けているように感じました。他にも大田さんは沖縄に関する本を書いているので、この本を含め、ぜひ読んでみてください。



(沖縄平和記念公園にて撮影・沖縄平和祈念堂)

『意外と知らない沖縄県の歴史を読み解く！』

沖縄「地理・地名・地図」の謎

監修 安里進 発行 実業之日本社

三E 阿部慎之助



沖縄に行ったり沖縄について調べたりしたことがある人なら、沖縄の地名のユニークさや読み方・書き方に驚き、どうしてこのような名前になったのか疑問に思ったことが一度はあるはずだ。沖縄に沢山存在する「ガマ(石灰岩で形成された、沖縄本島南部に多く見られる鍾乳洞のこと)」の名前が代表的な例だろう。「アブラガマ」や「シムクガマ」など、日本本土では見られないような名前がついている。どうしてこのような不可思議な名前になったのだろうか？その答えは、沖縄の方言である沖縄語(うちなーぐち)にある。

例えば、「チビチリガマ」は沖縄語で「尻」を意味するチビと「切る」を意味するチリ、そして「鍾乳洞」を意味するガマが合わさって出来たもので、ガマを流れる細い谷川がどこへ流れ着くか分からないということからこの名が付いた。

このような名前はガマだけでなく「糸満(いとまん)」や「名護(なご)」「西表(いりお

もて)島」などの私たちがよく知る地名や、「保栄茂(びん)」「勢理客(じつちやく)」などの初見では読めないようなもの、さらには「沖縄」自体も沖縄語に由来するとされている。つまり、沖縄の地名や場所の名前がユニークなのは、私たち本土の人々にとつて馴染みのない沖縄語に由来しているからなのである。



(恩納村・万座毛)

今回の紹介したものは、沖縄の謎のほんの一部に過ぎない。沖縄にはまだ沢山の不思議が眠っているのである。この本では、数多ある沖縄の謎の中で、地名や文化などの地理的なものや歴史的なものが多数紹介されている。

その内の一つをここで紹介したい。沖縄には西原町という町がある。この名前を聞いて、この町が沖縄の西部に位置するものだと思うだろう。しかし、実際は沖縄本島中部の東海岸に存在している。なぜこのような名前になったのか。その謎を解くには、沖縄語で「東・西・南・北」を「アガリ・イリ・フェー・ニシ」と言うことと、西原町が琉球王国の中心地であった首里城の北に位置することが

鍵となる。つまり西原町という名前は、琉球王府の置かれた首里城の「北(ニシ)」の原に位置していることを意味し、「西」は表音に合わせただけで漢字の意味とは違うのである。私はこの説明から、地名だけでも沖縄の歴史や文化が感じられて、とても面白いと思った。皆さんも是非この本を読んで、興味深い沖縄の文化や歴史の謎について知ってほしい。

『琉球の時代』

大いなる歴史像を求めて』

著者 高良倉吉 発行 筑摩書房

三E 吉崎絵菜



皆さんは「琉球王国」と聞いて何を思い浮かべますか。実は現在の沖縄県のことです。「琉球王国」は明治維新で政府により、「沖縄県」という名に改名させられました。これは歴史の授業で習ったことがあると思います。そこでは独自の文化が花開き、外国との交易を通じて成り立って、栄えていました。約四五〇年間にわたり、日本の西南諸島に存在した王制の国だったのです。伝統的な衣装、個性的な食べ物、独特の祭祀、現代と全く違う琉球王国での生活を想像すると、ワクワクして

きませんか。きつと楽しいはずですよ。

日本は南北に地形が伸びており、北ではアイヌ文化など、日本全体で文化は同じではありませんでした。これは日本の特徴でしょう。文化の特徴が違うからこそ、食べ物、芸能、特産品、など様々なものと触れ合い、そして、心を豊かにすることができると思います。そうした日本の特徴を感じてもらいために、私は琉球王国の歴史について知ってもらいたいと思います。この本を選びました。また、昔の琉球王国に思いをめぐらせ、今はもう見ることができない、琉球王国の悲劇と栄光の歴史を感じ取ってもらいたいです。

沖縄といえば、広大な美しい海、三味線の音色、おいしいサーターアンダギー、そしてシーサー。日本で唯一の地上戦が行われた沖縄戦争も忘れてはいけません。このことから沖縄にはたくさんの魅力があることが分かります。しかし、多くの人は沖縄という地域の表面的な一部分しか知らないと思います。私はその沖縄の内部の奥底までを多くの人に知ってもらいたいです。なぜなら、どのようなしてなりたったのか、現代にいたるまで、どのような歴史を経てきたのか、知識として頭に入っている、頭に入っていないの違いで、実際に沖縄に訪ねてみて、私たちが感じることが出来る量に雲泥の差が現れると思うからです。

この本を読んで、歴史が好きでない人にも

沖縄が経てきた時代を感じてほしいと思います。また、歴史を知る意味を少しでも見出してくれればいいと思います。

『気象・気候からみた沖縄ガイド』

著者 真木太一 発行 海風社

三F 大内祐璃



わたしは高校二年生の時沖縄に修学旅行に行つて、沖縄の気候や気象について深く学びたいという思いから、この本を選びました。

沖縄県の多くの島は年平均気温が二二℃を超え、また、年降水量二〇〇〇mmを超え、高温多湿に加え、熱帯夜は三か月も続きます。しかし、意外にも冬は曇雨天が多く肌寒いそうです。沖縄といえば台風イメージが強いと思いますが、台風以外の自然災害にも沖縄が苦労していることがあります。それは干害です。沖縄は降水量の年々の変動が大きく、地形・地質的な条件で安定した水量が得にくく、気温が高いために、地面・植物からの蒸発散が多いことで、干ばつに陥りやすいです。また、河川がほとんどないことも関係しています。しかし、都心部では住宅の屋上に貯水タンクを整備して、渇水対策を行っているそうです。ここまで沖縄

の敬遠されているところを挙げてきました
が、もちろん良い点もあります。

沖縄は高温多湿の気候を活かして、サトウキビ、マンゴー、パイナップル、パイヤ、バナナ、シークワーサー、ビワなどの南国のフルーツを栽培しています。これは沖縄のような気候の地域にしか栽培できないものだと思います。自然災害や虫の影響によって作物がダメになってしまうのではないかと、思いうかたもいるとおもいますが、近年では栽培技術の向上により品質のいい状態のものが安定して取れるようになってきています。また、コーヒー、紅茶の栽培も進められています。このように農業面で大きなポテンシャルを秘めていると思います。

また、観光資源において日本では沖縄は指折りだと思えます。なぜなら、海の透明度が高く、サンゴ礁も発達しており、マングロープなどの亜熱帯多雨林は日本では沖縄にしかありません。また、生物の多様性も高く、ジャングル好き、生き物好きにはとても魅力のある場所だと思えます。

この本は、沖縄の気象・気候から考えられる要素がとて深く書かれており、あらゆる視点から考察されていると思います。実際のデータや数値を使つて考えを掘り下げ、取り組みがされていて、地理的、数学的に物事を考えることが好きな人に強くお勧めしたい本だと思いました。

『図説 琉球の伝統工芸』

企画編集 天空企画 発行 河出書房新社

三下 鈴木沙知



ガラス、焼き物、染め物、織物：沖縄にはその土地の歴史や特徴を生かした、様々な伝統工芸品があります。ここでは本書に書いてある琉球ガラスについて、少し紹介したいと思います。

琉球ガラスの歴史は約千年と沖縄の伝統工芸の中で最も浅いそうです。戦後の沖縄のガラス工業の需要はほとんどが駐留米軍人によるもので、現代のように日本国内でも多く愛されるようになったのは一九七〇年代からでした。戦後当時は米軍が持ち込んだ飲み物の廃瓶を切つて、コップや漏斗代わりになるところから始まり、その後は溶かして形を変えて、造花など装飾性の高い製品にするまでに至りました。当時の装飾技術の研究の成果が、現在の琉球ガラスの技術的基盤になっているようです。

廃瓶を再利用する中で生まれた「泡ガラス」という製品があります。本来ガラス製品は透明度が求められるため、制作過程で気泡が入ってしまうとその価値は落ちてしまいます。しかし泡ガラスはあえて気泡を入

ることで、小宇宙を連想するほどの美しい作品になるそうです。現在では廃瓶の再利用だけではなく、新しい原料を使用する方法も編み出され発色剤も豊富になりました。それによってカラーバリエーションが広がり、更に多くの人を魅了しています。

さらには最近、素材で温かみのある琉球ガラスと透明感のあるクリスタルを融合させ、新しいジャンルを生み出そうという動きも見られています。これからも琉球ガラスは発展していき、国内外の人々を魅了し続けるでしょう。

琉球王国誕生から現在まで、時代を超えて受け継がれてきた沖縄の伝統工芸。本書では前述の琉球ガラス以外にも魅力的な沖縄の伝統工芸品が、歴史と供にカラー写真付きで紹介されています。沖縄は美しい景色やおいしいごはん、シーサーなどが有名で、それらに注目しがちです。しかし以前沖縄へ行ったことがある方も、

まだ行ったことがない方も、この本を読んでまだ知らない伝統工芸品の魅力に気が付くかもしれません。もし今後沖縄を訪れる機会があったらぜひ、大切な人や自分へのお土産に買ってみたいいかがでしょうか。



(民泊中の工芸体験で作ったシーサーのマグネット)

『沖縄について』

『私たちが知っておきたいこと』

著者 高橋哲哉 発行 筑摩書房

三G 梅田翔成



「沖縄」と私たちは聞くときれいな景色、様々なアクティビティなど楽しいイメージを思い浮かべるだろう。しかし、いまだに続く問題として米軍基地問題がある。このことについては「沖縄」という言葉を聞いてあまり多くの人が意識しないだろう。背景にある沖縄戦はニュースで取り上げられたとしてもあまり内容が深掘りされない、戦争を語る人も少なくなり、戦争を知る人も減少し、教科書に載っていたとしても興味を持つ人はそう多くないだろう。被害者は二〇万人を超えると言われており、被害は甚大なものだったと考える。

昨年、沖縄の防空壕に行つた際、当時アメリカ軍によつて投げられた爆弾による破片が今もなお、洞窟の上側に張り付いていた。メディアなどの情報では感じられないような現実を実際に見て思うことが数多くあった。しかし、沖縄全体に沖縄戦の被害の爪痕が残る中ですべて自分の目で見ることは難しい。

本書は私たちと同じように本州に住んで

いて、沖縄戦のまだ見えていない部分がある筆者が、沖縄の今も続く問題を知るためにこれだけは知っておく必要があると思います。歴史に沿って写真やデータなどとともに沖縄のアメリカとの戦争による人権問題、基地問題などの問題と沖縄が位置する場所による沖縄の扱われ方などがまとめられている。例えば近年の台湾有事問題がある。中国の動きを見るためにアメリカは沖縄にある米軍基地に注力するとおのずと日本も自衛隊を沖縄に動員する。その一方、中国は自分たちを邪魔するアメリカの動きを把握することができ、このように沖縄はアメリカと中国の争いの防波堤とも言える位置にある。また前と同じような被害を出さないために、日本政府は対策を今すぐに考えるべきだろう。

また「対話」というものもあり、そこには筆者と沖縄住民の対談が載せられている。対談内容は前述したような沖縄が抱えている問題についてだ



(嘉手納基地にて撮影)

が、沖縄住民からの視点に加わることに注目してみたい。やはり当事者から見る視点と部外者から見る視点

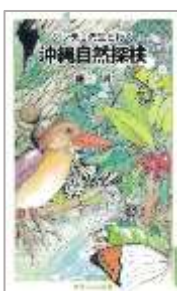
は異なり、より事案を掘り下げにいつている。私たちが住んでいる日本という国の中で起こっていることを今からでも知ることは沖縄に限らず必要だと思う。もし沖縄のことを知りたいのなら一度本書を手にとってみてほしいと私は思う。

『ゲッチョ先生と行く』

『沖縄自然探検』

著者 盛口満 発行 岩波書店

三G 金城智咲



南の島。ふりそそぐ熱い日差し。白い砂浜とエメラルドグリーン色の海。常緑の森の中にひそむ、ヤンバルクイナやイリオモテヤマネコなど独自の生き物たち――みなさんが「沖縄の自然」と聞いたとき、思い浮かべるのはどのような風景でしょうか。(本文より)

この冒頭から始まるこの本は沖縄本島をはじめとし西表島、石垣島、与那国島、宮古島の自然を紹介した本です。沖縄の自然と聞いて「海」や「森」など抽象的なことは思いつくが沖縄の海には何があるのか、沖縄の生物にはどのような特徴があるのか、沖縄の木や草は本州とどう違うのか、といった



(比謝川自然体験センター・ヤシガニ)

疑問は残ったままなのではないでしょうか。まるでその場にいるのではないかと感じるほどに五葉を活用しながらこれらの疑問をイラストとともに台本型の文章で解き明かしていきます。

例えば沖縄中南部にはなくて、日本本土にある植物は何だと思いませんか？それは特に子どもたちが好きなドンダリの木です。そのため中南部出身の人はドンダリを拾ったことがない人も多いらしいです。ドンダリの木がない理由は、沖縄の地形にあります。沖縄の中南部は今から数十年前は浅い海の底だったためサンゴ礁が発達していました。それから何十万年もかけてサンゴからできた石灰岩が厚く堆積していききました。そしてドンダリの木であるブナ科の植物は石灰岩地にはあまり生えないためドンダリをつける木が見られないというわけです。また沖縄地上戦により焦土と化した地域が多いのも理由の一つとされています。このように普段考えたこともない意外な事実がこの本でわかります。

沖縄の自然には、はかり知れない魅力があ

り宝石箱のようです。しかし、商業開発事業により、地形の改変、水質の悪化、赤土等の流出、希少動物の減少、サンゴ礁の衰退等が生じている他、外来生物の侵入による生態系の攪乱が生じるなど、沖縄らしい豊かな自然環境が失われているようです。私たちは宝箱を未来に繋ぐために、もう一度自然と見つめ合って自分にできることを考えていかなければなりません。

『琉球の音楽を考える』

歴史と理論と歌と三線

著者 金城厚 発行 榕樹書林

三頁 加納悠彩



沖縄の音楽には独特な雰囲気がある。情味のある旋律や歌詞、そしてそれをより引き立たせる三線などの歴史ある楽器によって琉球の音楽は聴く人すべてを魅了し世界中で認知され愛されてきた。この本はそんな魅力について興味と理解を深めることができる一冊である。

本書は、四部で構成されており、第一部では琉球音楽の発展の歴史を紐解くうえで非常に大切な役割を持つ中国との国交の歴

史から始まり、自然の力への「祈り」の役割、三線音楽、中国との国交の際に重要な行事と考えられていた「冠船踊り」の始まりなどの古琉球の時代から琉球王国が崩壊した近代に至るまでの変化が様々な視点からとても分かりやすく語られている。他にも、沖縄の伝統楽器「三線」と中国の「三弦」、三線が日本に伝わって根付いた「三味線」にも焦点が当てられている。三弦との違い、三線の楽器需要の社会学などが資料を用いて詳しく説明されている。

第二部では、日本本土の伝統音楽に比べると異質である「リズム」や沖縄音楽独自の「琉球音階」、「楽節」について理論的に語られている。多少難解な文となっているが、図や実際の楽譜、わらべ歌が例として多く用いられている為知識があまりなくとも楽しめる内容となっている。

第三部では「祈りの歌」、「暮らしの歌」、「心の歌」の歴史はもちろん三つの歌の比較や共通する部分についても語られている。日本を代表する芸能の一つであるエイサーにも触れられており、その源流や目的についても書かれている為、知識を深めることができる。

第四部では、祝賀の席で歌われる御前風様式、古くから親しまれてきた昔節様式、長詩型で特徴的な口説様式、いきいきとしたリズムが特徴的な二揚様式の四つの古典

音楽について紹介されている。

本書は沖縄独自の言い回しと標準語の両方で歌が紹介されており理解が容易い。他にも琉球の歴史だけでなく中国や日本本土の歴史と紹介されているため、興味を持ちやすく知見を深めるのに最適な一冊ではないかと思う。

『沖縄語をさかのぼる』

著者 島袋盛世 発行 白水社

三戸 椎名紀仁



琉球語はどのような変化を経て現在の姿になったのだろうか。本書の目的は琉球諸語の多様性に触れることと、琉球諸語の祖語(親言語)を再建(復元)・比較することで琉球祖語にさかのぼるというものだ。

まず一章では日本語と琉球語の違いと共通点について触れている。違う点の一つ例として挙げられているのは『つまる音(つ)』の違いだ。日本語では「あつ!」や「痛つ!」など語末につくものだが、琉球語では「つわー」「豚」や「つままりび」「誕生日」など語頭につくのだ。また、「つ」がないと「わー」「人」となるので意味が変わってしまうという点でも違っている。他にも『ん』から始まる語や『複雑な

ヤ行音』など多くの違いがある。共通点としては「母音」「子音」「音節」「語彙造」「文構造」などが挙げられる。

二章では琉球諸語の多様性について触れている。これまで述べられてきた琉球語だが、「しま」によって言葉に違いがあるのだ。北琉球語に含まれる「奄美語」「国頭語」「沖縄語」、南琉球語に含まれる「宮古語」「八重山語」「与那国語」があり、「ありがとう」という言葉だけでも十三個の言い方が存在している。

そして三章ではついに琉球語をさかのぼりはじめる。ここでは古い沖縄語の姿がどうであったのか、各琉球諸語の語彙を規則的な対応関係に焦点を当てて比較し再建している。そこには「K」の「h」への変化や語末の「C」の「E」への変化が取り上げられていた。また、その他の方言の同じ方法で再建された祖語を比べ、特徴を述べている。章の終わりには、琉球祖語からさらにさかのぼることが可能なのか言及している。日本語と比較し、日本語と琉球語が分岐する以前の共通言語「日本琉球祖語」を再建し、さかのぼるという方法があるそうだ。

最後に、筆者が琉球語の魅力とし



(民泊先にて撮影)

て挙げているのは、「しまごとに異なることばの多様性」である。「しまの数だけことばがある」ともいえるような様々な種類の方言があるのだ。現代の琉球語に至るまでに様々な言語とその変化があることを知ることができた。

そのうえで、こんなにも美しく温かみのある言葉を後世に残していきたいと思う。

『荒れ地を農地にプロジェクト』

SDGs 沖縄での実践

著者 上田英代 監修 上田裕一
発行 幻冬舎メディアコンサルティング

三戸 荒野心太郎



沖縄は日差しが強く、雑草の生えた荒れ地ばかりだった。本書ではこの沖縄の大地を農地にしていく流れがカラー写真や詳細な説明を用いて綴られている。

物語は脳外科である彼が長期療養許可を一年間とり、沖縄へ行くところから始まる。沖縄に着き様々な文化にふれ、沖縄の人達と交流をしていく。そんなある日彼は沖縄で病院を開院した。ふと患者さんを見ると「毎回、毎回白いご飯が食べられるなん

て」と頭を下げていたのが見えた。本土では病院食をマズイ、マズイと社会風評になつてゐるのに、と強烈な印象を受け、沖縄の土をなんとかしよう、と決心し「荒れ地を農地にプロジェクト」が開始される。

「荒れ地を農地にプロジェクト」では生ゴミ処理の根本を焼却から発酵へ変え、堆肥にすることで大地を肥沃にしていくな。またその台地で驚くほど成長がよく味も濃厚な島バナナを育てることに成功している。このように生ごみが島バナナになる様子は「SDGs」の目標「つくる責任 つかう責任」に関連している。食品ロスを削減し、資源を循環させ、廃棄物を減らすことで、この目標の達成に貢献している。「SDGs」の具体的な実践を見たい人におすすめの本です。

『琉球方言とウチ・ソト意識』

△著者△内間直仁 △発行△研究社

三丁 横塚広大



私たちは、去年の修学旅行で沖縄に行きました。その際民泊にお世話になりましたが、そこでは琉球方言を感じることは、あまりありませんでした。しかしこの本では、そんな琉球方言について沖縄社会とその文化などについて、

それらを支える意識から詳しく深く知ることが出来る本になっています。

沖縄社会全体の特徴を挙げてみると、県外に出た若者たちがユーターンしてくる現象が見られるということ、県外から移住してくる人が多いということ、比較的に長寿な人が多いということ、離婚をする人の割合が多いということ。この特徴を踏まえた沖縄社会とその文化を、琉球方言を研究することで考察しているのがこの本の特徴です。

最後にこの本は、内容がとても難しく理解するには時間がかかる本ですが、琉球方言を学びたい人にとってはとてもオススメな一冊です。



【編集後記】

横塚君が紹介している本の作者である「内間直仁(うちまぢよくじん)」先生。懐かしいです。学生時代に先生と出会い、沖縄の人の柔らかい話しぶりというのは、こんなにも魅力的なのかと思わせる独特なイントネーションを今でも鮮明に覚えています。(健)

▼取材協力

・成田エイサー美ら海会

▼令和六(二〇二四)年度末蔵書冊数

図書館蔵書冊数 五四, 九四四冊

▼学校図書館の発行物

『Bibliothek』

新着図書の中から、お薦めの図書を紹介。

◆毎週発行

(学校内掲示及び学校HP掲載)

『READ』

教職員のおススメの本を紹介。

◆毎月発行

(学校内掲示及び学校HP掲載)

『図書館だより』

テーマに沿って図書委員が取材、編集。

◆毎年九月頃発行

(生徒配布及び学校HP掲載)

▼図書委員会 役員

図書委員長……高三H 椎名紀仁

副委員長……高二H 吉野由剛

副委員長……高一G 五十嵐友映

展示班

班長……高三G 梅田翔成

副班長……高二B 三浦波奈

副班長……高一C 西巻祐汰

蔵書点検班

班長……高三G 金城智咲

副班長……高二A 小津優直

副班長……高一F 小澤琉

図書館だより班

班長……高三B 大谷涼

副班長……高二G 中村優斗

副班長……高一G 近藤十和子

**Narita High School
& Junior High School**

Library